

愛知の博物館

1968年 NO. 12・13



愛知県博物館協会

目 次

愛博協第1回文化講演会

『世界における日本の美術』について 村井国男 1

『龍影閣』小史 岡本健治 2

愛知県博物館協会主催

『第1回文化財めぐり』参加の記 広瀬 鎮 4

愛博協主催

『文化財探勝会アンケート』から 坂部正登 6

表紙写真： 熱田神宮に移築された「龍影閣」

愛博協第1回文化講演会

『世界における日本の美術』 について



村井国男

記録的な役目もあるので、日時から書きはじめる。ときは、昭和43年10月14日午後1時45分に開会した。ところは名古屋市教育館、講師は哲学者であり文芸評論家であり美術評論家であり、また社会評論家でもある谷川徹三氏。演題は「世界における日本美術」集った聴衆は約200人。

講演要旨を次に記録するけれど、2時間に近い大講演を、要旨といえどもこの紙上で間違なく書くことは至難なことなのである。書いていくうちに紙数がつきたらそれが途中であろうとそこで終わることにする。

『世界における日本文明の位置から話しを進めていく。印度、中国が独自の文明で、朝鮮日本は中国文明をめぐる衛星文明である。中国文明の刺繍のもとに日本文明の絵、建築庭園その他は生まれたと世界の学者は定義づけている。それが戦後日本との往来がしげくなってきて、日本の独自性がわかってきた。

中国の真似とは思わなくなつたが、中国の影響のもとに生まれたという見解は一致している。

以上が序論であるが、本論に入る。11世紀後半から20世紀はじめ浮世絵が西洋に影響を与えていた。浮世絵版画は西洋の絵画のゆきづまりに新しい示唆を与えている。これで遠近法、ベタ塗りで強調する方法を学んだ。ヨーロッパも平面的に描いた新しい手法を打ち出した人で、こういう画材を絵にしたことでも日本のつながりがわかる。

琳派の影響とみられるものに、有名なドガの踊子がある。たらし込みの手法に似た方法をつかっている。構図も琳派的である。更に伊勢型紙は自然のモチーフの装飾的にしたもののはビリヤスリーの作に影響を与えた。

さらに18世紀のやきものがあちらのやきものに影響を与えていると思われる。補右衛門の絵を真似て、いまではベルギー、ドイツ、オランダなどの窯でつくられている。オランダは伊万里も真似られている。イタリヤで伊万里の人形をみたことがある。本当のものかとよく見ると襟が左前になっていた。

中国の絵画などいいものがアメリカへ流れているが、日本のものは流れていなかつたので、その評価も不当に低くされていた。戦後日本との往復交流も激しくなりがぜん評価が高まつた。一昨年ルーブルで日本古代美術展が開かれたとき、平重盛像をもつていった。が、ダビンチのモナリザと比較して賞讃していた。』

というように延々と続くのであるが紙数がつきないうちに一言だけ省略せずに伝えたいことは、『日本のやきもの、特に茶碗の美しさは素晴らしいものである。志野の美しさ瀬戸黒の美しさなど、それぞれほれぼれするほど世界一の美しさであるが、しかしその美しさも本ものの美しさでなければならぬ、作家の身からでたものでなければならぬ。真似たものほどみにくいものはない。真似たものは世界一みにくい。』(愛知県文化会館企画課長)



『龍影閣』小史

岡本健治

明治10年には鹿児島に西南の乱が起り、九州地方に渦巻いた硝煙も、同年9月城山の陥落によって収まり、翌11年5月には、時の参議兼内務卿大久保利通が兜刀に斃るると云う不祥事などがあったとはいえ、明治維新的大業は着々と進み、明治天皇は既に大権を掌握し、藩邦の制を廃して、専ら内治の振作更張、外渉の更改拡充に、聖慮を尽くされていった。

時に明治11年5月、宝算26の若き明治天皇は親しく地方民情を憲し、国内産業を奨励せらるる思召を以って、8月下旬から北陸・東海地方を御巡幸あるべき旨を太政官布告で仰出されたのである。

偶々、時の愛知県令安場保和は明治9年頃から、名古屋博物館を設立し、広く工産物を蒐集陳列して斯業の参考に資することを意図していたのであるが、その気運がいまだ熟せず実現するに至らなかった。11年の早春、数名の有志者が奮起して、博物館設立のための数千円の寄附を申出たのである。愛知県では、これに若干の補助金を与ゆることとし、11年6月、当時の名古屋門前町總見寺境内（後に商品陳列館になった地）を買い受け、急拠建設の工を起した。天皇幸臨の時期に遅れぬためとその期日の切迫のため、工事は昼夜兼行で強行されると共に、一方、伊藤次郎左衛門、岡谷惣助等20余名を勧業委員として、官民相協力して、その出品物の蒐集に努力したのである。斯くて9月14日漸くその工竣り、その翌日の15日から11月3日に

至る50日間の博覧会が開催されるに至ったのである。会場敷地の面積3.937坪余、第1号館から第6号館までの陳列場が設置され、これらに要した経費概算12.252円で、内6.157円40銭は県税補助金、6.094円60銭が有志者の寄付金であった。

今の龍影閣の建物は、この博覧会場の略々中央北側に品評所として建設されたもので、当時の記録によれば、その建坪は1階6.2坪4、2階2.4坪6.4となっている。（その後増築、移築等により現在では1階8.9坪4.6、2階2.4坪8.9となっている）

余談に属するが、この博物館のその後の変遷は、翌明治12年1月有志が協同して資金1万円を醸め、株式組織によって維持することになったのであるが、なお資金の不足を憂い新株を増募し、株金33.975円とし、これに県からは年々補助金を与えられ維持されていたのであるが、明治16年7月に至り、従来の官民合同の組織を改めて純然たる県立として經營することになり、同年9月、今までの名称「名古屋博物館」を廃し、「愛知県博物館」と改めたのである。しかして日露戦役による国威の伸長は、また産業界の著しい進展を見るに至り、愛知県博物館の規模もその目的達成のためには狭隘、陋少となつたため、明治40年愛知県ではその改築を行なうこととし、予算372.300円を計上して、旧博物館を取締す。敷地も6.238坪に拡張して工事に着手して、43年3月に、建築物1,580坪余の新築を完了し、その名称も

「愛知県商品陳列館」として開館したのである。

この間、さきに便殿として使用された品評所は、その後「龍影閣」と称せられ、当初の位置から稍々移動されたが、明治天皇の聖蹟として保管され、建物も殆ど原形のままに維持されていた。

明治11年8月30日 明治天皇はときの右大臣岩倉具視、参議兼大蔵卿大隈重信、参議兼工部卿井上馨、宮内卿徳太寺実則、陸軍少将大山巖等の重臣顕官を主なる供奉者として東京を御発輦、前橋・高崎を経て、信濃・越後に入り、北陸道を越前・近江に進み、京都に着御、9月20日京都御発車、岐阜を経て(初め三重県御巡幸の予定であったが、三重県下に悪疫が流行したので中止された)、8月25日愛知県に鳳輦を進められ、同日午後5時10分名古屋下茶屋の行在所である東本願寺別院(真宗大谷派名古屋別院)に着御せられた。

翌8月26日は曇り、午前8時愛知県令安場保和の先導で行在所を御出門、県庁、公立医学校に臨御の後、午前11時博覧会場である博物館に着御せらる。そのときの御様子については「愛知県聖蹟誌」(愛知県編纂)に左の如く謹記されている。

『県令御先導にて、博覧会場たる博物館に臨御あり。時に午前11時なり。県官門外北面東上に奉迎す。此間奏楽あり。先づ便殿品評所の楼上に入らせられて、御饌あり。畢って県令博覧会規則、列品目録、委員人名簿、寄附金人名録を奉呈せられ、次に委員総代伊藤次郎左衛門祝詞を奏す(註祝詞は略す)。

右畢って県令及び委員総代御先導にて、陳列品を御通覧。此時各委員起立して敬礼を行ふ。御順路は第3館より第4館、次に東新館より金鶴の前を通御。此時また奏樂あり。それより第1館、第2館と御巡覧終りて、再び便殿に着御。午後1時擊析にて御供御へあり、直ちに御出門。奉送の儀は前の時の如し、同30分行在所へ御還幸ありたり。』

なお、名古屋市史によれば「実業奨励の聖旨を以て、多数の御買上品あり、且つ金三拾円を下賜せらる」とある。

天皇は翌27日には名古屋裁判所、公立師範学校、公立中学校、名古屋鎮台へ、さらに28日には熱田神宮に御参拝あり、同日午前8時聖駕を東に進められたのである。

その後この龍影閣は昭和7年に至り、名古屋の都市計画によって移転の止むなきに至り、庄内川に面した西区庄内公園の一角に移築し、またその保存の完全を期するため、時の貴族院議員松沢清次郎が発起人となり、龍影閣保存会を設立してその保存管理に当ったのである。しかして時移り人替り、併せて大戦時の窮乏は聖蹟を顧みる余裕さえもなく、幸に戦火の難を免れたとは言え、終戦時には荒廃その極に達したのである。

渡辺製菓社長野原新太郎氏はこの朽廃を痛憂し、率先龍影閣保存の任に当ったが、昭和21年遂に県から龍影閣の譲与を受け、専ら自力をもって聖蹟の保存に当ることになったのである。

氏はまた近世日本に於ける明治時代のもつ意義を深く認識し、明治天皇の御聖業、御遺徳を偲ぶよすがとして、天皇の遺品を中心に維新志士や顕臣烈士の遺品遺墨を蒐集して、昭和35年宝庫を増築し、これらを収藏したのであるが、明治100年に当り氏はこれらの文化遺産を私有すべきでなしとし、昭和42年5月、龍影閣とともに前記遺品100余点を熱田神宮に奉納することを申出でたのである。

神宮ではこれを受納することに決し、直ちに慎重に解体にかかり能う限り原形を毀つことのないよう留意し、古趣豊かな神宮境内北神地畔に再現造営し、昭和43年10月3日竣工、落成の式典を挙げたのである。なお龍影閣は隨時一般の拝観に供すると共に2階は玉座の聖蹟として保存し、階下は鍊成道場とし積極的活用を期待している。

ちなみに寄贈を受けた遺品遺墨の類は文化殿、宝物館に収め逐次展示している。

(熱田神宮宝物館)

愛知県博物館協会主催

『第1回文化財めぐり』参加の記

廣瀬 鎮

11月17日、愛知県文化会館へ出むくと、愛博協事務局のお世話をされている村井先生が、バスの到着を気にして外に立っておられた。今日は、愛知県博物館協会主催の、「第1回文化財めぐり—博物館探訪の会」を実施する日である。事務局のお手伝いのつもりで参加させて頂いたのであるが、配車、プログラム、配布物、お弁当にいたるまで、すべて用意周到に準備されて、ただ恐縮するだけであった。参加者は、学校の社会科関係の先生方や、社会教育、博物館に関心のある諸先生でしめられ、総勢35数名であった。

元東山植物園長のM先生と一緒にになり、隣席シートにおさまる。定刻10時に出発し、第一番に徳川美術館へ向かう。愛知県の博物館を知ってもらい、大いに利用して頂き、そして県下の文化財の現状についての認識も深めて頂く。これが、今回の事業の目的である。副会長の向井先生も御熱心に参加しておられる。熊沢館長の御説明で案内をうけ、刀剣についてのお話しを聞く、美術品としての刀の良さを理解するには、このうえもなく有益なお話しであった。折りから仏蘭西の著名な刀剣愛好家ポンピドウ氏、日本の本間博士も、刀剣展をみにこられており、感銘もひとしおであった。

2番目に隣接の蓬左文庫をたづね、織茂先生のお話しを伺った。日本、朝鮮、中国の古典と尾張関係の史料を主とし、蔵書は総数67,000に及び古書の博物館の名に恥じない。

特にこの文庫の事業は展示室を開放し、図書の閲覧、複写などの学術研究者へのサービス面の充実に特色があり、その施設、資料の利用がさらになされることが望まれている。ここでは資料展示室を見学、展示中の安南絵巻（安南交跡貿易渡航図）について聞く。茶屋四郎次郎に関する文献などが特別展中なので、歴史の先生方には、興味ふかいものが多かったろうと思う。私は特に尾州茶屋記録目録のプリントを頂き喜こんでいる。

会長の熊沢徳川美術館長から、「博物館紹介の窓口に、今回の参加者はぜひなって頂きたい」と挨拶があり、再びバスで豊清二公顕彰館を尋ねる。愛知県にゆかりの深い、豊臣秀吉、加藤清正に関する記念館であるが、市民の文化センターとして、市民の文化生活の向上のためにも巾ひろい活動をしている。ここで写真家の紅村先生から鎧や、肖像画などに関する詳細な御指導をうけたことは、博物館利用を考えるうえで、参加者も印象ふかく勉強になったようである。参加者の一員の先生は、小学生にわかる歴史館の解説を別に考える必要があると主張されていた。この顕彰館からつぎの目的地甚目寺觀音の宝物庫までは10分もかかる。文化財の仁王門より入って、境内を眺める。大徳院の宝物庫では、お茶の接待をうけ、茶室でひとときの憩を求めた。昼食後、大徳院住職より甚目寺觀音縁起、文化財の数々の御案内をいただく、仁王門は、建久7年（1196）再建、三重塔、寛

永々年(1627)再建ときく、永年にわたり土庶の拝を集めてきてるだけあって、今日もなお参詣者がたえない。本堂横の八百屋で、Sさんがデンデン太鼓をみつけてくる。私も買った。信仰と庶民の生活とが、どこかにかいまみられないものかと思っていたので、ゆらいで、たちこめる線香の香よりもこの方がうれしかった。

国分寺跡の宝物館へついた時は雨になった。国の重要文化財指定をうけている釈迦如来坐像2体、熱田大宮司夫妻坐像2体、開山覚山和尚像をうすぐらい収蔵庫の中で拝観した。雨にけむる古い小堂から勤業の音がきこえる。文化財に対する関心を一段と高めていくためには、こうした小さな施設の認識から始めねばならないようである。

最後に立ち寄ったのが妙興寺であり、勅使門をぜひ見学しようという目論見である。車内で文化会館の川崎先生から、簡単な紹介がある。修業僧対象の禅寺であるため寺宝などの見学が一切許されていないことを知る。そのためここでは、外から本堂を眺め、鐘楼を見上げて戻る。ついさそわれて、入りこんだ内庭の見事さにみとれたら、禅僧の一喝「中へ入ってはいかん！」心ない見物客と間違われた一コマは忘れることのできない事件であった。

文化財を真に理解することのむつかしさ、また見せることによって引きおこされる危険とその防止、こうしたことが、うまくとりあつかわれるようになるためには、県下の博物館も、一館の利益のみを考えている限りでは、とうてい力にならないに違いない。妙興寺では勅使門を見ずに途中から戻った人達もあった。これは、主催者側の不手際といおうか、準備不足によるところが大きい。第1回のことだから、色々と反論は許して頂きたいとは申したくない。愛知県の博物館を支えているのは他でもない我われ博物館なのであるから大いに反省している次第である。特にM先

生のいわれる、この種類の計画は一層多様なものにして、それぞれの分野の専門家を動員して、求めてアトランティスな、そして学芸的な勉強会にする必要があると考える。

参加された諸先生全員がら、大変建設的なアンケート解答をいただいた。これは実行委員の方がまとめてくれることになっているので、ごらん頂きたい。次回の企画に大いに役立てたいと考えている。博物館を身近かなものに感じていただく試みとして、今回の試み自体は果して成功であったろうか。数日の後、参加された文化学園のT先生から、博物館活動について大変関心をもったこと、今後も大いに博物館について勉強していきたいという電話をいただいた。何にもまさる喜びであった。（日本モンキーセンター附属博物館

幹事）

愛博協第1回文化財めぐり探勝目録

昭和43年11月17日(日)

- 徳川美術館
(名古屋市東区徳川町2の27)
「第42回日本文化史展—
日本刀の美・山城・備前」
- 名古屋市蓬左文庫
(名古屋市東区徳川町2の27)
「尾州茶屋記録展」
- 名古屋市豊清二公顕彰館
(名古屋市中村区中村町茶の木12)
「秀吉・清正の画像を中心とした常設
展示」
- 甚目寺
(海部郡甚目寺町大字甚目寺)
建造物(山門、塔)
瑞穂(鏡) 瓦(白鳳期) 古地図
田中訥言作 横絵等
- 尾張国分寺収蔵庫
(稻沢市矢合町2490)
重文 釈迦如来坐像 2体 外 3点
- 妙興寺
(一宮市大和町大字妙興寺)
建造物 旧国宝 勅使門
鐘楼堂 県指定・鐘・その他七堂伽藍

愛博協主催

『文化財探勝会アンケート』から

坂部正登

～11月17日におこなわれました愛博協主催の「第1回文化財探勝会」で、参加の方々に、博物館に対する認識度および当日の探勝会についてのアンケート調査を行ないました。

当日の参加者のなかから12名の方々の熱心な回答がよせられましたので、その主な御意見を紹介致します。今後のこの種の会合を催すにあたって参考になれば幸です。

アンケート質問項目は、

- ①「愛知県博物館協会をご存じでしたか。ご存じの方は何でお知りになりましたか？」
- ②「全国博物館週間に、全国各地でいろいろな行事が開かれておりますが、この週間のことをご存じでしたか。また今までに博物館が催す事業に参加されたことがありますか？」
- ③「本日の「文化財探勝会」について、企画実施内容、参加されてのご感想、ご意見など、出来るだけくわしく、きたんのないお気持をおきかせ下さい。また今後この種の会が催される場合どんなことを希望されますか？」

以上の3つについておたずねしました。

まず①については、半数の6名の方がまったくご存じありませんでした。またすでにご存じの6名の方でも、「他人から聞いてはいたが、くわしい内容は知らなかった」「新聞で関係記事をみたことがある」「PR不足ではないか」ということでした。

②の「博物館週間」について、ご存じの方は1名だけ、他の11名は知らないと答えてみえます。また「博物館の催す事業への参加」では、「県外の博物館の事業に以前参加したことがある」と答えた方が2名、「博物館の主催ではないが、博物館を見学したことがある」と答えた方が2名、他の8名の方から「参加したことではない」という回答をえています。

次に、一番興味をもって意見をおよせいたいたい③について、主なものをひろってみますと、

「文化財をみたいと思いながらも、一人ではなんとなく出かけることもできず日を送っていましたが、この企画に参加し、少しではあるが文化財のもつ偉大さを理解できたことを嬉しく思っています。とくにそれぞれの特徴などを説明してもらったことが良かったと思います」（22才女、小学校教諭）

「素人にもわかるように説明されて、たいへん興味深く感じ参考になった。また一層関心が深まってきた。」（43才男、小学校教諭）

「都市化、工業化の波に古いもの（文化財）が失なわれようとしている今日、このような会を開かれ、広く一般に啓蒙されることはただ単に文化財を守るだけでなく、我々に郷土をふりかえらせ、郷土愛を育てる上に大いに役立つものと思います。あまり知られていない文化財を紹介していただきたいものです」（32才男、小学校教諭）

「地域社会の歴史、文化財などの学習は、書物などのものだけでは、なかなかできないため、やはりこういう機会が多くほしいと思った」（23才、小学校教諭）

「大変有意義でした。正しい文化財教育を中心掛るつもりです。愛知の文化財に対する現場教師がいかに関心が薄いかを痛感しました。会長さんがいわれましたように、我々は時代に逆行するような動きに対しては、身をもって当らねばならないという自覚を高めることができました。」（41才男、中学校教諭）

など、ほとんどの方々から、今回の企画について、よろこんで向えられたことがわかります。

ただ、今回の会の手続上の問題や、今後の

企画については、

「せっかくの見学会の参加者が少なかったのは申込み期間が少なかったからではないか。3日前に知ったのでは、予定がつかないので募集はもっと早く願いたい」(43才男、小学校教諭)

「企画について、参加募集は最低2週間前にわかるように、実施日はウイーク・デーに」(41才男、中学校教諭)

「....とくに交通の便が悪い場所は個人的に行きにくいので、そのような面からも企画をたてられることを希望します。また時代ごとに文化財を見学するとか、分野別(系統別)とかに分けて勉強できる機会をつくって下さることを希望します」(30才男、中学校教諭、22才図書館司書)

「できることなら、一つの場所を時間をかけてゆっくり参観できるよう工夫してほしいと思います。なお食事まで負担して頂いては心苦しくなるばかりです。会費を少々徴集されはいかがかと思います。また、人に知られた、表面的に見栄えのある物だけでなく、ひっそりと息吹いている文化財などの探勝計画を立案していただければ、望外の喜びに思います」(27才男、小学校教諭)

「たいへんよい会ですから、年間計画をたてて会員制でも結構ですから機会をもっと作ってほしい」(43才男、小学校教諭)

などなど、今後の企画をたてるうえで、大変参考になる御意見をほとんどの方々からいただきました。

その他にも、「名所旧蹟をお巡りになり、研究されている先生に同朋大学教授塚本守男先生がいられます。今後このような会にお招きされるとお喜びになるかと存じます」(52才男、幼稚園教員養成所教諭)

のような建設的な御意見もいただきました。これらのアンケートをまとめていて、みなさんの御意見から得たものは、

県下の博物館をたずね、探勝研究されてみえる方々は、まだまだ多数おみえになると思います。そういった博物館の支持者の組織を作つてゆくべき時代にきていくように思われます。一つの博物館による友の会組織は各地に存在していますが、その興味はかたよりがちであり、もっと巾の広い知識を求めておられる博物館ファンのためにも、県の博物館協会の友の会組織の必要を強く感じた次第です。

(日本モンキーセンター附属博物館
学芸員)

「愛知の博物館」NO. 12.13

発行日 1968年12月31日

発行者 愛知県博物館協会

名古屋市東区久屋町8-8

愛知県文化会館内 (電052-971-5511)

編集者 愛知県博物館協会実行委員会